

## [特別活動]

## 低学年における話し合い活動を機能させる支援について

－ 「各期に見合う話し合いの場の設定」と「終末助言の蓄積」によって営む学級会－

畑山浩樹朗\*

## 1 研究の出発点

前任校では、山間部の学校で5・6年生の複式学級を担任した。両学年合わせても10名前後という極少数の学級の児童は、幼少期から固定化されがちな集団の中で育ち、人間関係を築いてきた。そのため、お互いのことをよく知り、仲がよい反面、どこか自己主張に欠けている面も見られた。しかしながら、学級会を開き、話し合い活動を行ってみると、進行役の児童を中心に、児童一人一人が積極的に自分の意見を発言している。人数的なハンディをものともせず、黒板をうめるほどに、多様な考えが次々と挙がることもしばしばあった。また、その話し合いのスタイルも、教師の出場をあまり必要とせず、児童の手による児童のための話し合いがなされ、特別活動のねらいである「児童の自治的活動」が見事に営まれていた。児童がいきいきとした表情で話し合う姿に、これまでの指導者が低学年のころから段階的に指導を積み上げてきたことがうかがえた。また、自分自身も低学年を担任する時には、この時目にした児童の姿に近づくことを目標に、支援をしていきたいと強く感じた。

そして、地域有数の大規模校に赴任して4年目を迎えた今年、1年生の担任となり、その機会に恵まれた。大規模校ならではの人数の利も生かして、1年生の児童の話し合い活動がダイナミックに展開していくよう、効果的な支援、適切な支援を学級活動の実践において積み重ねていきたいと考えた。

## 2 児童の実態と主題への迫り方

1年生の行動特性を考えた場合、他者意識の未熟さから、何より先立つのはまず自分のことである。いろいろな地域の保育園や幼稚園から集まった新しい仲間と共に過ごす初めての小学校生活。その中で、児童が相手のことを意識しながら、進んで話し合い活動に参加していくためには、児童一人一人に何について話すのかという明確な目的意識をもたせる必要があると考える。また、高学年の児童が見せる自治的な話し合い活動に迫るためには、低学年である今の時期から児童一人一人の話し合い活動への参加意欲を高めていかなければならない。そのために、児童の実態と年間行事・活動を考慮し、「各時期に見合う話し合いの場」を設定する。目的意識・課題意識を明確にした話し合い活動の場を作ることにより、話し合い活動に積極的に関わろうとする児童の姿が増えていくことを期待する。

また、他者との関わり不足が挙げられる今日である。児童は、友達と一緒にいてもテレビ・ゲーム機と関わる時間が多く、屋外で大勢の児童と遊ぶ体験は少ない。一人遊びや数人遊びが中心となっていることの影響で、他の児童との関わりがうまくできない、みんなで何かをするときに我を通してしまう場面も増えているのではないだろうか。ただ、児童が他者との関わりを拒否しているのかというと、決してそうではない。自分の考えや思いを発言し、それが周りにもしっかりと認められることで、さらに努力しようとする意欲を高めていく児童である。加藤盛彦氏は、『学校を作ろう 北斗プラン』の中で、学級会の終わりに教師が終末助言を行う視点として「(1) 集団決定を促した学びの姿を見出し、共有化する (2) 集団決定を阻害した要因に目を向けた姿を見出し、話し合いを高める手がかりとする (3) 集団決定の喜びを明らかにする (4) 次の活動への見通しや意欲付けを行う」と述べている<sup>1)</sup>。しかし、低学年の児童の場合、この終末助言の内容や各学級会における発言記録を口頭で終わりにせず、目に見える形で掲示し、残していくことで助言内容や参考になる発言・反応の仕方が児童に浸透し、以降の学級会の場面や学習活動においても生かされていくのではないだろうか。ひいては、「終末助言の蓄積」が児童同士がお互いの存在に目を向け、進んで話し合い、関わり合う場を生むことにつながり、話し合い活動の雰囲気も共感的なものに高めていくことができる

\* 上越市立春日小学校

と考える。

### 3 研究の目的

本研究では、「各期に見合う話し合いの場の設定」と「終末助言の蓄積と活用」によって、1年生の児童一人一人が進んで自分の考えを発言し、自分たちの力で集団決定に向けて話し合うことができる姿を求めていく。

### 4 研究の内容・手立て

研究の目的に迫り、話し合い活動を成熟させていくための手立てを以下のように講じ、その有効性を探る。

#### (1) 児童の実態に見合う話し合い活動の場作り…「各期に見合う話し合いの場の設定」

- ①新しい環境に慣れる段階      ②仲間作りの段階      ③活動作りの段階      ④活動見直しの段階  
⑤いろいろな活動に目を向けて取り組む段階      ⑥自分や友達よさ、学級が好きになる段階

年間の活動を見越して、以上の6つの期を設定する。話し合いの目的を明確にし、児童一人一人が意欲的に自分の考えを述べるような話し合い活動の場を作る。

#### (2) 共感的な話し合い活動の雰囲気を醸成するための教師の出場の工夫…「終末助言の蓄積とその活用」

学級会における教師の出場は事前の議長団への指導、学級会カードにおける支援、また話し合う中で話題が逸れた場合の修正、出された意見の整理やまとめ、さらに話し合い活動後の評価など、多数挙げられる。児童が「話し合い活動は自分たちの時間である」という意識を強くもって話し合い活動に臨むために、教師の出場は必要最小限としていきたい。ただし、話し合い活動を全て子ども任せにするだけでは価値ある学びとはなり得ない。そこで、話し合い活動を見つめ、的確に価値付けていく終末の教師の発言を大切にしたい。毎回の活動終了後に、話し合いの中で見られた児童の望ましい姿や発言を取り上げて賞賛するとともに、その記録を掲示し、いつでも活用できる環境を整える。児童の姿から見られたよりよい話し合いのモデルを認め、それを広げていくことで、児童一人一人が関わり合う話し合い活動の場の雰囲気を共感的なものにしていきたい。

### 5 研究の実施計画

時期	期の設定	話し合い活動の場（主なもの）	教師の出場・支援
1 学期	4月	①新しい環境に慣れる段階  「学級目標」を作ろう  ・「夢に向かって3つのC (Chance, Challenge, Change)」という学校目標のもとで、学級集団として目指す姿をどのような「学級目標」にまとめていくか、話し合う。  係活動を決めよう  ・学級内の当番活動を分担する係活動の仕組みについて理解し、各係への所属をどのようにして決定するか、その方法について話し合う。	・学級会の役割について説明する。 ・2回目の学級会までは、教師が進行役を担う。 ・児童の意見を集約、整理し、後日、児童の思いを生かした学級目標を2～3案提示する。 ・話し合いの中で見られた児童の発言や反応を記録して、学級会の終わりに取り上げて紹介する。またその記録を児童がいつでも見ることができる形にして掲示し、残していく。
	5月	②仲間作りの段階  全員遊びで何をしよう  誕生日会を開こう  ・仲間作りを広げる活動として、お楽しみ会や誕生日会を設定し、その計画や内容について話し合う。	・学級会カードを配り、活用の仕方を説明する。 ・児童の中から議長団（議長・副議長）を編成する。 *議長団は児童が2人ずつ輪番で務めることとし、連続する2回の学級会において、それぞれが議長と副議長の役を交互に経験した後、他の児童に役を引き継ぐ。
	6 ・ 7 月	③活動作りの段階  1学期お楽しみ会を開こう	・議題説明の際、活動場所の指定と活動の選び方（*1つはこれ

				まで行ってきてみんなが楽しいと感じているもの、1つは新しい活動)について条件説明をし、意見のまとめ方を焦点化する。
2 学期	9 ・ 10 月       11 ・ 12 月	④活動見直しの段階       ⑤いろいろな活動に目を向け、取り組む段階	<div style="border: 1px solid black; padding: 2px; margin-bottom: 5px;">2学期の目標を相談して決めよう</div> <ul style="list-style-type: none"> <li>・学級目標の達成度を一人一人が振り返り、その達成のために2学期に重点的に取り組むことがらについて話し合う。</li> </ul> <div style="border: 1px solid black; padding: 2px; margin-bottom: 5px;">2学期の係を作ろう</div> <ul style="list-style-type: none"> <li>・1学期の係活動の成果と反省を振り返り、2学期に編成する係活動について話し合う。</li> </ul> <div style="border: 1px solid black; padding: 2px; margin-bottom: 5px;">公園遊びの楽しさを紹介しよう</div> <ul style="list-style-type: none"> <li>・生活科で秋の公園で遊ぶ活動を通して、楽しかった活動を友達や学級、学校に広めていく。</li> </ul> <div style="border: 1px solid black; padding: 2px; margin-bottom: 5px;">なないろ忘年会をしよう</div> <ul style="list-style-type: none"> <li>・学級の10大ニュースを話し合ったり、季節に合わせてどんな楽しい活動ができるかを話し合ったりする。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・教師の出場を、議題についての補足説明と話し合いの後の終末助言の他は極力設けないようにしていく。</li> <li>・議題箱を設置し、児童の生の声や考えが議題に取り上げられるようにする。</li> </ul>
3 学期	1 ・ 3 月	⑥自分や友達のよさ、学級が好きになる段階	<div style="border: 1px solid black; padding: 2px; margin-bottom: 5px;">かくし芸大会をしよう</div> <ul style="list-style-type: none"> <li>・学級の友達に自分の得意なこと、1年間でできるようになったことなどを紹介する会の計画について話し合う。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・議長団を4名に再編成(*新たに黒板書記を2名設ける)し、黒板にみんなの意見を記録する方法を説明する。</li> </ul>

\*上記の活動の他、議題や話し合う内容に応じて、ミニミニ学級会を設ける。

- ・「〇月の生活目標を考えよう」
- ・「学校行事(体育祭、文化祭、避難訓練他)を振り返ろう」
- など

## 6 研究の実際と考察

### (1) 各期に見合う話し合いの場の設定について

#### ①新しい環境になれる段階

4月18日 「学級目標を決めよう」の話し合いから

入学式から2週間が経ったころ、「学級目標を決めよう」という議題で1回目の学級会を開いた。はじめに、児童には、学校目標「夢に向かって3つのC(今あるチャンスにチャレンジし、自分をチェンジしていく)」の意味を説明し、そこから児童は1年生である自分たちがどんなことをがんばりたいかを考えた。その際、具体的なイメージをもつことができるように「1年2組は、(な)クラス」と、穴埋め部分の言葉を考えるように働きかけた。児童からは、「べんきょうをがんばるクラス」「あたまがよいクラス」など、「小学校=学習の場」という意識が強いいためか、学習に関する言葉が多く挙げられた。この他には、「ともだちがたくさんいるクラス」「みんながなかよしのクラス」などの意見が出た。意見の数が多く、また学校生活が楽しくなるような目標を据えたいという教師側の意図もあり、この時点では1つに決めず、児童の意見を一旦預かった。そして後日、児童の意見を合言葉のように言いやすいものにまとめ、「べんきょう100てん! なないろ2組」「めざせ、ともだち100人! なないろ2組」の2つを提案した。これらの言葉から受ける印象を児童に聞くと、「友達がたくさんできそう」「『1年生になったら』の歌みたいでいい」と、「めざせ!ともだち100人! なないろ2組」に好意的な意見が多く集まり、学級目標が決まった。

この時期の児童は、学校生活への不安や緊張を感じつつも、期待とやる気に満ちあふれ、発言意欲が大変高い。「学級目標を決めよう」という議題への発言数も20にのぼり、自分の思いを話すのに適切な議題だったと考えている。

## ②仲間作りの段階

## 5月2日 「全員遊びで何をしよう」の話し合いから

学校に来て1ヶ月が経ち、友達との関わりが広がる時期である。そこで、1時間の昼休みがある水曜日の前半30分を仲間作りを育む「全員遊び」の時間に設定し、どんな遊びをしようかと学級会で話し合うことにした。この議題は遊ぶことが大好きな児童にとって、過去2回の学級会以上に、自分の意見が出しやすと考えた。また平仮名の学習もひと通り進めてきていることから事前に「学級会カード」を配り、前もってそこに自分の意見を書くことにした。この話し合いでは、児童が自分の意見をしっかりとって話し合いに臨むことができたため、初めて全員が挙手をして自分の考えを発表することができた。また、遊びの場所も特に指定しなかったことからグラウンドや体育館、教室で行うたくさんの遊びが候補として挙がった。しかしながら、意見が広範囲に渡りすぎてしまった結果、選択決定の段階で児童の希望が分散してしまった。時期に見合う議題であったが、児童の意見が拡散してしまわないように、場所や時間などの条件も提示し、話し合いの的を絞っていく必要を感じた。

## ③活動作りの段階

## 5月22日 「誕生日会を開こう」の話し合いから

児童は年に1度の誕生日が嬉しくてたまらない。「あと10日で僕の誕生日なんだ」「僕は7月に7歳になるんだよ」など、誕生日に大きな期待を寄せ、話す姿をよく目にする。そんな子どもたちの思いを吸い上げ、また学級の友達のことをよりよく知ろうという意図から、誕生日会を開き、その内容について話し合うことにした。今回は、議題について説明する際に、活動場所の指定（教室で実施）をし、することを3つ決めようと話した。人前での発言に少しずつ慣れてきた児童は、誕生日会を楽しくしたい、盛り上げたいという気持ちから、学級会カードに「歌をおくる」「記念写真を撮る」「ゲームをする」「踊りをする」などの考えを書き、いきいきと発言した。全員遊びについて話し合った時は、楽しそうな遊びの意見がたくさん出されたが、今回は単に楽しいだけでなく、「歌をおくる」「写真を撮る」など、誕生日会の目的に合った意見が出されていた。児童の創意を広げ、新たな活動を展開していく上で「誕生日会」は格好の題材であると思われた。ただ、意見に対して児童が抱く賛成・反対の理由は「〇〇がいいです。わけは、楽しいからです」といったものが多く、候補を絞り込む上で効果的な賛成・反対意見はまだなかなか出てこなかった。

## ④活動見直しの段階

## 9月10日 「2学期の目標を相談して決めよう」の話し合いから

2学期は1学期の実践の上に、新しいものを重ねていく時期でもある。そこで、学級目標や係活動については、まず実践してきたことを見直すところから取りかかった。そこで2学期の始まりに際し、「2学期の目標を相談して決めよう」という議題を設定した。まず、1学期に立てた学級目標である「めざせともだち100にん！なないろ2組」について、どれくらい達成できたかを一人一人が振り返った。「◎（とてもよくできた）、○（まあまあ）、△（あまりよくできていない）」の3段階で振り返ったところ、◎が10人、○が15人、△が2人と、学級の児童の半数以上がまだ目標を十分に達成できていないと振り返っていた。その理由として、「100人も友達がない」「クラスの友達と

は仲良しだけど、違うクラスの友達が少ない」などの意見が出ていた。そこで、「友達を100人にするために、どんなことをがんばればいいと思いますか」と投げかけ、学級目標を達成するために2学期に取り組む事柄を話し合った。児童から様々な意見が出た後で、一旦は「ともだちになろう」に決まった。しかし、「その言葉は恥ずかしくて言いづらい」というB児が出てきた。そこで、他の言い方はないかと尋ねると、「いっしょにあそぼう」なら言いやすいのではというアイデアが出され、それにB児も納得し、話し合いがまとまった。

自分の素直な気持ちを話せる児童、みんなが納得できるように話し合おうとする児童が少しずつ増えてきていると感じた。



写真1 「2学期の目標を相談して決めよう」の黒板記録

### ⑤いろいろな活動に目を向けて取り組む段階

9月21日 「公園遊びの楽しさを紹介しよう」の話し合いから

生活科の「秋の公園で遊ぼう」という学習で、学校周辺の公園へ出かけた。児童は友達や遊具、自然と触れ合っ、思い思いの遊びを楽しんだ。そこで、この遊びの楽しさを自分の学級や学年の友達に伝えていく活動を提案した。まず、どんな遊びをしたのかを児童が発表した。自分がした遊びの楽しさを紹介すると共に、友達がどんな遊びをして楽しんだのかを知ることができ、話し合いを通してそれぞれの気持ちを確かめることができた。その後、どのように遊びの楽しさを紹介するかを話し合い、「ポスターを作って学校中に貼る」「お昼の放送で紹介する」「遊びに自分たちで名前を付けて有名にする」など、活動を発展させていくためのアイデアを次々に出し合う児童の姿が見られた。学校生活が始まって半年にさしかかる時期。各教科の振り返りや活動計画作りの中でも話し合いの場を設けることで、児童は仲間の広がりや活動の広がりをより強く感じるのではないかと感じた。

#### (2) 終末助言の蓄積とその活用

○教師の終末助言と児童のきりり発言の掲示

毎回の学級会の終わりに、教師は話し合い活動の中で見られた児童の望ましい発言や姿を終末助言の中で取り上げ、その内容を教室掲示としても残してきた。「全員遊びで何をしよう」の話し合いでは、遊び方について疑問をもった児童が「質問してもいいですか」と発言した。この発言を終末助言の中で取り上げると、以降の学級会などでこの言葉がよく聞かれるようになった。児童一人一人が意見の内容をしっかりと理解し、話し合おうとする姿がさらに高まったためだと考える。また、何の遊びをするかが決まった後で、別の遊びを希望していた児童から「〇〇も楽しいからいいや」という発言があった。自分のこだわりを素直に譲る姿勢も大切であることを認め、掲示としてもその発言を残しておく、相手や学級の声に応じ、協力しようとする姿勢が見られてきた。

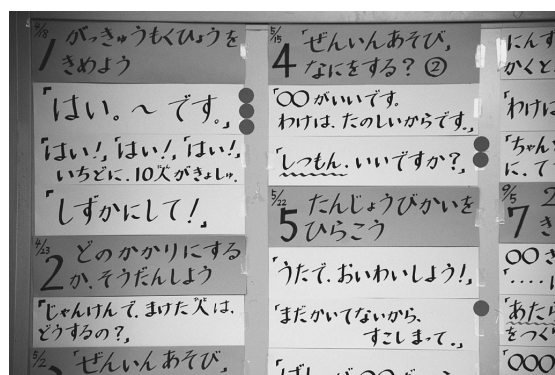


写真2 終末助言の掲示

ある学級会では、議題に対して児童の「はい」「はい」という声が続かず、合計35の意見が黒板に並んだ。そこで、「はいのかず、35!」という掲示を残すと、もっとたくさん発言しようという雰囲気が学級に広がった。それまで発言にやや消極的だった児童も、次の学級会でがんばって手を挙げて発言しようとする姿が見られた。

このようによい発言の仕方や意見の集約の仕方、適切な発言を記録し、学級共有の財産として残していくことにより、以降の学級会でそれをよいモデルとして使って発言したり、アイデアを練ったりする児童の姿が増えた。これは、児童一人一人がお互いの発言や態度に目を向けることで、相手の存在を認め、学級全体として話し合っ問題を解決しよう、協力して何かを考えようという気持ちが育っていることの表れであると思う。また、こうした活動の積み重ねが話しやすい雰囲気の醸成に効果を上げていくと考える。

## 7 実践の成果と今後の方向

本研究の出発点は、少人数ながらも活発な話し合い活動を展開していた小規模校の児童の姿に他ならない。閉塞的な人間関係の中では、自分の思いはなかなか言い出しにくい。だからこそ、よりよい話し合いの風土を育てるための支援に力を入れてきた。本実践の現在地は、まだ折り返し地点を迎えようとしているところだが、学級会を核に児童の話し合い活動が機能することを目的にしたこれまでの取組から、成果や今後の実践の方向性が見えてきている。

#### (1) 集団決定の達成感・成就感をもたせる

学級会は現在10数回を数えるが、終末助言以外にも教師の出場はまだ多い。低学年ゆえ、完全に児童任せというわけにはいかない。児童による話し合い活動は、集団決定に向け、自分たちの思い描くとおりに展開される場合もあるが、当然、その逆もある。ただ、これは1単位時間における集団決定の成否ではあるが、話し合い活動としての成否とは言い切れない。全ての話し合い活動に価値ある学びは存在し、学ぶ価値のない話し合いは存在しない。児童の自主的活動はそれが大人目からすればささやかなものであっても、自らの意志と思考を働かせ、仲間と関わって成し遂げるものであれば、それは児童の喜びや自信、愛着、誇りにつながっているはずである。教師は児童に身に付けて欲しい力を描きながら長い目で児童の成長を追い、価値ある学びを見出す助言、支援を行いたいと考える。

### (2) よさを認める場を広げる

児童が集団内において自己存在感・有用感をもてるようにすることが、みんなで作り上げる話し合い活動に不可欠ではないだろうか。児童がお互いのよさを認め合いながら活動に取り組むために、ベースとして押さえておかなければならないことは、児童一人一人はお互いに違う存在であること、どの児童も価値ある存在であること、という基本的認識をもたせることが肝要である。これまでの取組で、ようやく全員の児童が話し合いのステージに登ることができたと感じている。ただ、実践半ばのため、「⑥自分や友達によさ、学級が好きになる段階」において設定する話し合い活動の成果はまだ検証できていない。それでも、児童が「I'm OK! (自分はいい、できるんだ)」という自分に対する価値、有用感を認められる段階までは来ていると感じる。この先、自分たちの活動の成果を振り返る話し合い活動を設定し、「You are OK!! (あなたはいい、すごいね)」「We are OK!!! (わたしたちの学級・集団はいい、すごいね)」と、児童が自分から他者、そして学級へとよさを認める場を広げていくことができるように、適切な支援を継続したい。

### (3) 温かい雰囲気での学びの場をつくる

本実践では、児童が自分たちの手によって話し合い活動を築き上げていくことを通して、個を育て、学級集団を育てることを目指してきた。ただ、学級会そのものがマンネリ化することがないように、今後も活動のシステムなど、粘り強く研究実践を積み重ねなければならない。また、児童もここで作り上げた常識がこの先、必ずしも通用しないという現実に困惑する。しかし、様々な思いや願いをもつ仲間の意見を聞き合い、それぞれの考えの中にあるよさを見付け、集団としての進むべき方向を探る活動は、社会生活を営むための基礎を培う上でも重要な学習である。「考える時間をください」という発言を記録して残した時に、それを使って「〇〇さんに考える時間をあげようよ。いいアイデアが出てくるかもしれないよ」と発言した児童がいた。私はこんな発言ができる児童を育て、温かい雰囲気に満ちあふれた、楽しい学びの場を広げていきたい。これができるのが話し合い活動の醍醐味ではないかと考える。



写真3 議長団の児童による進行

### 〈引用文献〉

- 1) 長崎大学教育学部附属小学校 『学校をつくろう 北斗プラン』 2003年、90～91pp

### 〈参考文献〉

- 2) 橋本定男 『子どもが力をつける話し合いの助言』 明治図書、1997年
- 3) 松永昌幸 『子どもがもえる活動づくり』 明治図書、1997年